

中期アウグスティヌスにおける 聖書解釈の思想

—*De Doctrina Christiana*

I. 7. 7.~ I. 10. 10., II. 7.9.~II. 7.11.—

水 落 健 治

1. *De Doctrina Christiana* (以下 *DDC* と略記) において、アウグスティヌスは、聖書解釈の問題を扱っている。しかしその中心的構造は、問題が多岐に互っているため、ともすると見失われがちである。本論稿は、同書における聖書解釈の思想の基本的構造を、*Confessiones* 等、同時代の著作を若干参照しつつ、明らかにしようとするものである。

2. 単に物的存在者のみならず、何らかの仕方で存在するものはすべて「もの」⁽¹⁾ *res* であるが、この「もの」は「享受 *frui*—使用 *uti*」という観点によって区分される。「享受」とは「愛によって何らかのものにそれ自体の故に固着 *inhaerere* すること」⁽²⁾ であり、「使用」とは「用いられるべきものを、愛するものの獲得に還元 *referre* すること」⁽³⁾ である。「もの」はこの観点によって三種に区分される。第1は「享受されるべきもの」である。これは世界の創造者なる三位一体の神であり、これは享受された時その甘美さによって人間を至福にする⁽⁴⁾。第2は「用いられるべきもの」としての物的時間的なもので、それは用いられた時、人間を至福に向かうように援け支え、その結果人間は享受されるべきものに到達し、これに固着 *inhaerere* し、至福となる⁽⁵⁾。第3は、これらのものを「享受し用いる主体」としての人間であり、彼には、享受し用いる対象を選択する能力が賦与されている⁽⁶⁾。

従って、人間が至福になるためには「愛の秩序」が要請される。即ち、一方で人間が、本来用いられるべきものを、本来享受されるべきものなる神を獲得することに還元 *referre* する時、それは享受されるべきものの獲得を援け支え、その結果彼

は享受されるべきものに到達し、それに固着し、至福となるが、他方、人間がこの「愛の秩序」に従わず、本来用いられるべきものを享受の対象として選択した時には、至福への道程は、劣ったものへの愛に言わば絡みつかれて妨げられ、彼は本来享受されるべきものに到達できなくなってしまうのである⁽¹¹⁾。

3. 所で、ものを享受し用いる主体としての人間は、その対象を自由に選択できるのであるから、彼が享受の本来の対象たる神を享受の対象として選択できるためには、その神を知ることが予め可能になっていなければならない。それは如何にしてなされるのであるか。以下テキストに即して視て行く。DDC I. 7. 7—I. 8. 8 で、アウグスティヌスは、異邦人の神概念について論じている。de-us という音節が耳を打つ時意識にもたらされる思惟 cogitatio の内容は様々であるが、これは二つに区分される。第1は「肉体の感覚 corporis sensus に属するもの」、第2は「魂の知性認識 animi intellegentia に属するもの」⁽¹²⁾である。

肉体の感覚に属するものとして神が思惟される時、神は、天自体、天の中で最も輝く光体、世界自体として、或いは人間の如き優れた姿を持つ輝くもの等として思惟⁽¹³⁾される。即ち、感覚を介して受容され記憶に貯えられている表象 phantasia に依るのであれ、その表象を魂の内では結合分離して形成された想像 phantasma に依るのであれ、神は感覚把握の対象として思惟されるのである。

これに対し、魂の知性認識に属するものとして思惟される時、神は、知恵ある生命 sapiens vita として思惟される。

〔註〕 神が知恵ある生命として思惟される場合についての記述 (n. 8) が魂の知性認識に属するもの場合に属することは、直接述べられてはいないが、テキストを分析すれば明らかになる。アウグスティヌスは n. 7 で、神についての思惟の内容を二つに区分し、魂の知性認識に属するものとして神が思惟される場合についても簡単に述べたが、それは、神が excellentissima natura (n. 6) として思惟されていることを示すには、それで十分だったからである。そして n. 8 では、神が immortalis natura (n. 6) 即ち sapiens vita ipsa (n. 8) として思惟されていることを示すために、この第2の場合について再度詳述する。

しかし、知性認識に属するものは、内体の感覚を介しては、認識されることも伝達されることも不可能である⁽¹⁴⁾。では、神を知恵ある生命として思惟する人は、その思惟内容を如何にして獲得するのであろうか。

感覚を有する人間が外界を感覚する時、知覚されるのは様々な物体の形象 species である。そこで神を思惟しようとする人は先ず、それら魂に受容された形象に自らの思惟の眼差を向け intendere⁽¹⁵⁾ しなければならない。その時彼は、物体の内のあるものは生きており別のものは生きていないことを認識する。そこで彼は、すべての物体は生きているかいないかの何れかであると区分 dividere し、生きている物体を生きていない物体よりも優れているとする antepone⁽¹⁶⁾。次に、生命を持つ物体と持たない物体との差異に注目し、生命を持つ物体には、その物体を動かす生かす原理としての生命 vita がなければならないと判断する⁽¹⁷⁾。そして、物体は部分においての方が全体におけるよりも小さいが生命はそうでないという事態から、物体と、それを生かす原理たる生命とは全く異質のものであると知性認識 intellegere⁽¹⁸⁾ し、生命は物体を生かすことができるが、ある物体が他の物体を生かすことは不可能であるという事態から、物体よりも物体を生かす生命の方が優れているとする⁽¹⁹⁾。次にその生命自体に思惟の眼差を向け、生命には、感覚なしに物体を生かす生命（植物の生命）と、感覚を有する生命（動物の生命）と、感覚に加え知性をも有する生命（人間の生命）があると判断し、植物の生命よりも動物の生命を、動物の生命よりも人間の生命を高位に置く⁽²⁰⁾。そこで彼は、人間の生命（魂）を視るために、自己の魂に思惟の眼差を向ける。先ず自己の魂の内には、五官を介し外界の事物を知覚する能力 anima per corpus sentiens⁽²¹⁾ がある。しかしこの能力だけでは五官の二つ以上に関わる物体を統一的に感覚することはできない。そこで彼は思惟の眼差を、五官の各々を介して受容された物体の形象が皆そこに運ばれ、五官をお互いに統括する「魂の内的な力」 animae interior vis⁽²²⁾ としての内的感覚 interior sensus⁽²³⁾ に移す（人間はこの能力までは動物と共有している⁽²⁴⁾）。しかし人間は、単に物体を感覚するのみならず、それについて判断する。そこで彼は、判断の能力たる推論の能力 ratiocinans potentia⁽²⁵⁾ に思惟の眼差を移す⁽²⁶⁾。しかしこの能力も不変ではない⁽²⁷⁾。何故なら、推論によってある事物について判断を下す時、我々の魂はある前提から結論へと時間的に動いているからである。そこでこの事態を認識し、同時に「不変なるものは可変的

なるものよりも優れている⁽²⁸⁾」ことを認識した時、彼は知性的自己認識 *intellegentia sua* へと思惟の眼差を高める⁽²⁹⁾。この段階において彼は、自己を反省的に回顧する。まず彼は、神は如何なるものであるべきか自問する。「今まで自分は、生命なきものよりも生命あるものの方が、可変的なものよりも不変なるものの方が優れているとして来た。更に、知恵なきものよりも知恵あるものの方が優れている。従って、神がもし存在するなら、それは何か『不変の知恵ある生命』*incommutabiliter sapiens vita* でなければならぬ⁽³⁰⁾。しかし現実にかかる生命の存在することは如何にして知られるのだろうか」。そこで彼は更にこう自問する。「生命あるもの、不変なるもの、知恵あるものの方がそうでないものよりも優れていると私が言うのは何故であるか。既に私が、不変にして知恵ある生命を何らかの仕方⁽³¹⁾で知っていて、これを不変なる真理の尺度 *regula veritatis* として、それとの比較によって、他のものを判断しているからではないか、『優れている』とはその尺度により近いことではないか」。そこで彼はその不変なる尺度の在り場所を求めて、自己に思惟の眼差を向けるが、その時認識されるのは自己の可変性である。人間の知性認識する魂は、愚かな状態から知恵ある状態へと変化するからである。そこで彼はこう考える。「自分は可変的だから、不変にして知恵ある生命についてのこの不変なる知は、自己に内在しているのではない。むしろ自分は、自己の内で自己を超えた所でこの知を観ているのだ⁽³²⁾。しかも既にこの神についての知を有していても、自分は充分な仕方⁽³³⁾で、不変にして知恵ある生命たる神を知っているのではない。むしろ自分は、神を知っていながら知らないという矛盾した状態にある」。そこで彼はこの事態を、神から何らかの光が彼の内に射し込んでいるようなものと考え、この光は何か、何処から射し込んでいるのかを見出そうとし、思惟の眼差を一切の想像 *phantasma* から引き離し⁽³³⁾、自己の内に沈潜させる。その時、彼の思惟の眼差は自己を超えた所で神に到達し、ほんの一瞬⁽³⁴⁾神に触れる。これが「造られたものを通して、神の眼に見えないもの *invisibilia* を洞察する」こと (*Rom.* 1 : 20) に他ならぬ⁽³⁵⁾。

4. 所で、かく神を思惟した異邦人は神を享受できたのであろうか。まず、神を「肉体の感覚に属するもの」として思惟した異邦人が、神を享受できなかったことは、物体ならざる神が物的なものとして誤った仕方⁽³⁴⁾で思惟されている所から、明

らかであろう、そしてその理由は、彼らの物体に対する転倒した愛に他ならない。神を正しく思惟するためには、感覚を介し受容された物体の形象を、魂の内で真理の尺度 *regula veritatis* と比較 *conferre* し、判断を下すことが必要であるが、彼らは物体を享受すること、つまり「愛の秩序の破壊」の故に、魂の眼差 *acies animi* を真理の尺度に向けることができず、両者を比較することもできなくなっているの⁽³⁶⁾である。

では、神を「魂の知性認識に属するもの」として、不変なる知恵ある生命として思惟した異邦人（恐らくはプラトン主義者）は神を享受したであろうか。ここで我々は、先に述べられた「享受」の定義（cf. 2 節）に、時間的継続を示す「固着する」*inhaerere* という語が用いられていたことに注目しなければならない。即ち、神の享受は、単に①神を正しく思惟することであるのみならず、②その思惟された神に固着することでもなければならないのである。⁽³⁷⁾然るに、彼らは神にほんの一瞬触れただけであった。従って彼らは、享受の条件の第2を満たしてはおらず、神を享受したことにはならないのである。彼らについてこう言われている。「しかし（神を）観て、逃げ去る者は、肉内的影の習慣の故に弱い精神の眼差を持っている。従って、自ら『優れている、卓越している』と告白しているものよりもむしろ後のもの劣ったものを追い求めている人は、捩曲った習俗という言わば逆風によって、御国（即ち享受の対象たる神）から押し戻されている」（*DDC* I. 9. 9）。即ち、彼らは物体の形象から神にまで上昇できたにも拘らず、自らの精神の眼差の弱さの故に、そこに留まり固着できず、そこから逃げ出してしまったのである。そしてその眼差の弱さは、肉内的影の習慣、捩曲った習俗、つまり自ら『優れている』と告白しているものよりもむしろ劣ったものを愛するという「愛の秩序の破壊」に原因している。

5. 従って、何れの場合も、本来用いられるべき時間的空間的なものを享受するという「愛の秩序の破壊」の病いが癒されて初めて、神の享受は可能になる。所で、癒しがもし病いの状態に対応してなされなかったら、人は健康には至れない。そこでこの癒しは、人間が既にそこに拘束されている可感的物的なものを「乗物」⁽³⁸⁾ *vehiculum* とし、それに導かれて魂が愛の秩序を獲得し、神の享受に至るという仕

方でなされた。即ち、第1に、御子の派遣を頂点とする神の時間的世界における配慮 *dispensatio* を通して⁽³⁹⁾、第2に、それ自体は物的なものである「標」*signa* としての文字 *littera* を通して⁽⁴⁰⁾である。聖書を介して神の享受に至る道程は、この第2に他ならない。

6. アウグスティヌスは、*Esai.* 11 : 2 と *Matth.* 5 : 3~10 を結合させた独特の聖書⁽⁴¹⁾解釈から、この道程を七つの段階に区分した。この段階は *DDC* II. 7. 9~11 において述べられている。以下テキストに即して見て行くが、同様の区分が *De Sermone Domini in Monte* (*DSDIM* と略記) I. 1. 3~I. 4. 12 にもあるので、この書をも参照する。

聖書を介して神の享受に至ろうとする人間が到達しなければならない第1の段階は「神への畏れ」*timor dei* である。すべての人間は至福を求めているが、それは不死を持つことにより初めて与えられる⁽⁴²⁾。然るに人間は死すべきものであり、死は将来必ずやって来る。この事実を思惟した時、一切の傲慢 *superbia* は打ち砕かれ⁽⁴³⁾。これが神への畏れで、これは換言すれば「謙遜」*humilitas* である⁽⁴⁴⁾。

第2段階は「敬虔」*pietas* である。これは、時間的に書かれた一個の書物である聖書を信じて、その権威 *auctoritas* を承認することに他ならない。即ち、聖書の或る箇所は読者の悪徳を非難し、別の箇所は理解困難であるが、斯かる場合に、自分の方が知恵があるとは考えず、寧ろ聖書の語ることの方が一層優れており真であると信ずることである⁽⁴⁵⁾。

第3段階は「知識」*scientia* である。聖書解釈は正にこの段階に属する。聖書はそれを読む人に「愛の秩序」の規範 *praecepta* を示す。即ち、聖書の内容の中心は、神はそれ自体として愛されるべきであるが、隣人は我ら自身と同様に、即ち我ら自身への愛が神に還元 *referre* されるのと同様に愛されるべきであるということに他ならない (*Matth.* 22 : 37~39)⁽⁴⁶⁾ (物体と自己に対する愛は、病いにある人間もこれを所有するので、戒めとされる必要はなかった)⁽⁴⁷⁾。しかし、この知識は単に所有されるに留まらない。愛の秩序の規範が示された時、人は自らがその規範から如何に隔っているかを同時に知る。そして、既に彼は神への畏れを持ち聖書の権威に服している⁽⁴⁸⁾ので、自らのその姿に嘆かざるを得なくなる。この感情 *affectus* によって彼は

熱心に祈り、聖霊からの慰めを獲得し、絶望によって押し潰されなくなる。⁽⁴⁹⁾

こうして彼は義 *justitia* に飢え渴き、第4段階「剛毅」*fortitudo* に至る。剛毅により彼は、① 過ぎ去る事物に対する転倒した喜悦の一切から自らを引き離し *sese extrahere*、② そこから自らを背け *inde se avertere*、③ 永遠なるもの即ち三一神に自らを向け直す *se convertere*。⁽⁵⁰⁾ 所謂「回心」*conversio* である。

さて、彼の魂は、三一神の光の輝きを遙かに観るが、反面彼の魂は完全に浄められたわけではなく、劣ったものへの欲望 *appetitus* はまだ残っており、この欲望の故に魂は神へと集中できずに混乱し、神の光の輝きを観た時同時に、自らの精神の眼差はまだ弱く、その光には耐え続けられないことを感ずる。⁽⁵¹⁾ そこで彼は、この欲望から自らを浄め、自らを、現実に「愛の秩序」の規範に従うように訓練する。しかし、回心によって彼は既に神を愛し始めているので、この訓練は隣人愛の訓練となる。即ち、憐れみという仕方で弱い隣人を愛する訓練で、これが第5段階「憐れみの助言」*consilium misericordiae* である。⁽⁵²⁾

かくして、魂が愛の秩序に完全に従うに至った時、魂の混乱は失せ、良心 *conscientia* は善きものとなり、⁽⁵⁴⁾ 精神の眼差は浄められ神を見続けるに耐え得るようになり、彼は「快いものとして」顕れ始めた神を享受し始める。⁽⁵⁵⁾ これが第6段階「知性認識」*intellectus* である。⁽⁵⁶⁾ がこの享受は、この世に在る限り完全なものにはならない。むしろ神は「謎において、鏡で見るように」観られるに留まるのであり、ここに「信仰」と「希望」が意味を持って来る。⁽⁵⁷⁾

ここにまで至った人は、愛の秩序に従っており、人に取入ろうとする願望も、いかなる不幸も、彼を将来与えられるであろう神の完全な享受から逸脱させることはない。これが、聖書を介して神の享受に至ろうとする人間がこの世で到達する最後の段階「知恵」*sapientia* である。⁽⁵⁸⁾

7. さて以上の諸段階の中で、聖書解釈は第3段階「知識」に位置づけられている。ではこの「知識」とは何か。*DDC* II. 9. 14 にこう言われている。「次に正典中で明瞭に書かれた箇所——生の規範でも信の尺度でも——を一層賢く勤勉に探求すべきである」。ここに聖書の内容が二つ述べられている。第1の「生の規範」*praecepta vivendi* が、先に述べられた「愛の秩序の規範」即ち神と隣人に対する二重の

愛の戒めであることは、*praecepta* という語が用いられている所から明らかであろう。しかし第2の「信の尺度」*regula credendi* とは何であろうか。これは恐らく、古代教会の所謂 *regula fidei* ⁽⁵⁹⁾ の如きものと推察される。即ち、御子の派遣を頂点とする世界創造から終末に至るまでの救済史についての知識である。聖書は、それを読む者に愛の秩序の規範を示す (*praecepta vivendi*)。聖書の權威に服する者は、その規範と隔っている自らの姿を嘆く。その時この *regula credendi* の内容を信ずることにより、彼は回心へと導びかれるのである。

しかし、既に回心した者が聖書を読むということは、この枠組の中で、如何なるものとして理解されるのであろうか。この問題は、第6段階「知性認識」の性格についての考察、即ち信仰と知解についての考察に関わって来るので、今論ずることはできないが、ただ次のことは確かであろう。即ち、既に回心を経た人が聖書を読むのは、第5段階「憐れみによる助言」に在る者としてであるということである。彼は回心を経て既に神を愛し始めているとはいえ、未だ「愛の秩序」の規範に完全に従ってはいない。その時 *regula fidei* の内容を信ずることにより、彼は徐々に、神以外のものに対する転倒した愛 (*cupiditas*) から癒され、愛の秩序の規範に従う (*caritas*) ⁽⁶⁰⁾ ようになる。憐れみにより弱い隣人に愛を与えるという訓練は、まさに、*regula fidei* に対するかかる信仰を持つ時初めて可能となるのである。回心を経た人は、自らの転倒した愛からの完全な癒しを神に求めつつ、自らの罪に嘆きつつ、聖書を読むのである。

以上我々は *De Doctrina Christiana* において、聖書解釈が如何なるものとして捉えられているかを視て来た。愛の秩序を求めらる聖書解釈——これがアウグスティヌスの聖書解釈だったのである。

註

- (1) *DDC* I. 2. 2. *quod nulla res est, omnino nihil est.*
 (2) *ibid.* I. 4. 4. *amore inhaerere alicui rei propter se ipsam.*
 (3) *loc. cit.* *quod in usum venerit, ad id, quod amas obtinendum referre.*
 (4) *ibid.* I. 5. 5. (5) *ibid.* I. 4. 4. (6) *ibid.* I. 3. 3. (7) *loc. cit.*
 (8) *loc. cit.* (9) *loc. cit.* (10) *loc. cit.* (11) *loc. cit.*

- (12) *ibid.* I. 7. 7. Sane quoniam diversis moventur bonis, partim quae ad corporis sensum, partim quae ad animi intellegentiam pertinent. ここで ‘bona’ が使用されている理由は不明だが、直前の moventur が cogitare の意味であることは、n. 6 末の “mouet ad cogitandam...”, 及び n. 7 冒頭から明らかである。(Aug. においては cogitatio が motus animi と言われている)従ってここで ‘bona’ を cogitatio の内容としても誤りではなかろう。思惟 cogitatio とは、時間的に可変的な人間の魂に固有な働きで、神には思惟はない (*De Trin.* XV. 16. 25., *DDC* II. 5. 6.) そしてこの語は基本的には、①可感的・可知的なものの知 notitia を記憶の中から意志により意識にもたらずこと (*De Trin.* X. 10. 16., XV. 6. 10.: XII. 14. 23. etc.), ②それら意識に登った知を意識の中で結合分離すること (*De Trin.* X. 10. 16., XI. 8. 13f. *Conf.* X. 11. 18. etc.) を意味する。
- (13) *loc. cit.* (14) cf. *Epist.* 147. 3. (15) *Conf.* X. 6. 9. interrogatio mea intentio mea (est). (16) *DDC* I. 8. 8. (17) *loc. cit.* (18) *Conf.* X. 6. 10. (19) *DDC* I. 8. 8. (20) *Conf.* X. 6. 10. (21) *DDC* I. 8. 8. (22) *loc. cit.* (23) *Conf.* VII. 17. 23. (24) *loc. cit.* 同箇所についての Gibb and Montgomery の註参照。
- (25) *loc. cit.* (26) *loc. cit.* (27) *loc. cit.* (28) *loc. cit.* incommutabile praeferendum esse mutabili... (29) *loc. cit.*
- (30) *DDC* I. 8. 8. Quam (sc. vitam intellegentem hominum) cum adhuc mutabilem viderint, etiam huic aliquam incommutabilem coguntur praeponere, illam scilicet vitam quae non aliquando desipit, aliquando sapit, sed est potius ipsa sapientia.
- (31) *loc. cit.* Quam (sc. sapientiam) si non viderent, nullo modo plena fiducia vitam incommutabiliter sapientem commutabili vitae antepoherent.
- (32) *loc. cit.* Ipsam quippe regulam veritatis, qua illam clamant esse meliorem, incommutabilem vident nec uspiam nisi supra suam naturam vident, quandoquidem se mutabiles vident.
- (33) *Conf.* VII. 17. 23.
- (34) *loc. cit.* et pervenit ad id, quod est, *in ictu trepidantis aspectus.*
ibid. IX. 10. 25. *rapida cogitatione* attingimus aeternam sapientiam...
DDC I. 9. 9. Qui autem *videt et refugit*, ...
- (35) *Conf.* VII. 17. 23., *DDC* I. 4. 4.
- (36) *Conf.* X. 6. 10. homines autem possunt interrogare, ut invisibilia dei per ea, quae facta sunt, intellecta conspiciant, sed amore subduntur eis et subditi iudicare non possunt. ... sed illi intellegunt, qui ejus (sc. speciei) vocem acceptam

foris intus cum veritate conferunt.

- (37) *DDC* I. 10. 10. purgandus est animus, ut *et* perspicere illam lucem valeat, *et* in haerere perspectae... 二つの条件が共に必要なことが *et...et* の構文で述べられている。
- (38) *DDC* I. 4. 4. (39) *ibid.* I. 11. 11. seq. (40) *ibid.* II. 5. 6.
- (41) *Sermo* VIII. 17., *Enarr. in Ps.* XI. 7., XLIX. 9., CXVIII. s. 12. 3. 20., CXIX. 2.
- (42) cf. *De Trin.* XIII. 8. 11. (43) *DDC* II. 7. 9. (44) *DSDIM* I. 1. 3.
- (45) *DDC* II. 7. 9. (46) *ibid.* II. 7. 10. (47) *ibid.* I. 23. 22., I. 24. 24.
- (48) *ibid.* II. 7. 10. (49) *loc. cit.*, *DSDIM* I. 2. 5. (50) *DDC* II. 7. 10.
- (51) *ibid.* II. 7. 11. この「神の輝きを見る」経験が、先に(3節)述べられた異邦人のそれと同一のものであるか否かは問題であるが、決定的な相違は、この段階の神直観においては、人は既に謙遜なものとなり、聖書の權威に対する信仰を有していることである。或いは Aug. はここで、所謂ミラノの神直観 (*Conf.* VII) とオステリアのそれ (*Conf.* IX) とを救済論的に位置づけているのかも知れない。
- (52) *DSDIM* I. 3. 10. (53) *DDC* II. 7. 11. (54) *DSDIM* I. 3. 10.
- (55) *DDC* II. 7. 11. (56) *DSDIM* I. 4. 11. (57) *DDC* II. 7. 11.
- (58) *loc. cit.*
- (59) cf. A. Adam, *Lehrbuch der Dogmengeschichte*, Bd. I. ss. 82-89.
- (60) *DDC* III. 10. 15. Non autem (scriptura) adserit nisi catholicam fidem rebus praeteritis et futuris et praesentibus. Praeteritorum narratio est, futurorum praenuntiatio, praesentium demonstratio; sed omnia haec ad eandem caritatem nutriendam atque roborandam et cupiditatem vincendam atque exstinguendam valent.